

追悼

故大澤俊夫先生の追憶

細川 幹夫

大澤俊夫先生が逝かれてから、はや一年が過ぎ去ろうとしています。ご存命中にはなにかとご指導やお世話になった先生が居られなくなると、その存在の大きさ（先見の明、将来構想、組織力とリーダーシップ、人を育てる力など）がしきりに思い出され、それに反してさまざまなお配慮に比べられなかった自分の無能さが想起されます。大澤先生とは十歳違い。来年四月にはいま話題の後期高齢者の仲間入りです。忘却しないうちに追憶の記を書かせていただきたいと思えます。

思い起こせば、昭和四〇年四月に道徳科学研究所に入所させていただきましたが、そのきっかけは某大学附属中学校で昭和三六年から三年間持ち上がるの学級担任となり、その間「道徳の時間」も担当したことに起因します。三八年度末に担任から解放されましたので、それを機会に専門外の道徳教育内容を点検・吟味したいと思い、学生時代から承知していた廣池博士創立の研究所に二年間内地留学させてもらいたいと大学長に申請しました。

ところが、「専門教育とは直接関係がない」との理由で却下されました。そこでモラロジーとのご縁から

指導していただいた国立教育研究所長の平塚益徳博士にご報告すると、それなら私の所に来なさいと言われ、後に「最初二年程は希望通り、道徳科学研究所に入れてもらいなさい。廣池次長には話してあるから」とのことでした。

この入所に関して、もう一人の方に色々ご相談しました。それが大澤先生です。先生とは昭和三八年夏から始まった瑞浪分園での「教育者研究会」の創設以前からご厚誼をいただいてきました。先生は大学に留まった方がよいと思っておられたようですが、「生涯ここに居るなら」と言われて、研究所に入れていただく仲介の労を取っていただきました。

ヨーロッパで永続する旧家の研究 入所して間もなくのこと。大澤先生から貴方はヨーロッパの言語が好きなので、廣池博士の残された今後の研究課題のうち、「世界各国に於いて今日存続せる旧家と道徳性に関する調査」に取り組んではどうですかとの貴重な助言をいただきました。それに従事させてもらうと、間もなくブリチッシュ・カウンシルの推薦するアンソニー・R・ワグナー卿 (Garter Principal King of Arms) の名著『イギリスの系譜学』(オックスフォード大学出版局) に接し、著者とも直接交流できるようになりました(昭和四〇年度・道徳科学研究所紀要第二二号)。この著書は学術書としては異例の販売部数を誇った名著で、特にイギリス系移民の子孫が多いアメリカやカナダ、オーストラリアやニュージーランドなどでは、よく売れたようです。研究センターにもあります。このワグナー博士が所属した紋章カレッジ (College of Arms) は、学生のいない研究者ばかりの英国最高の紋章・系譜研究の中心地です。このカレッジのことは廣池博士も晩年になって知られたようで、旧『論文』追加文に記録されていました。このようにスタートから幸運に恵まれたのは大澤先生の貴重なご助言のお陰、さすがに廣池博士の学問的業績に生涯をかけて取り

組んでこられた先生の慧眼によるものです。

この著書の中ではもう一つの出会いがありました。ここではピチリム・A・ソローキンハーバード大学教授の有名な「社会移動」の研究が紹介されており、その手法を英国の貴族社会の社会移動の分析に應用していました。私の関心は英国王室の永続とそれを支えて国家の発展に寄与してきた貴族の盛衰、また国家のエリートたちの *noblesse oblige* (身分貴き者には崇高な義務あり) の実態にありましたが、その調査は困難をきわめました。当時は簡単に渡英して実態調査のできる時代ではなかったからです。

研究所での居場所 このように文献調査は比較的順調でしたが、所詮は素人の研究です。やがて平塚先生との約束の二年も終りに近づいた頃、また大澤先生が来られて「大学院で社会学を専門に研究してはどうか」とのご助言です。私の本来の専門は海洋生化学と理科教育法であり、将来はソ連のスプートニク・ショックに対応する「新科学・理科教育の方法を研究してはどうか」との平塚先生のお勧めで上京したものですから迷いましたが、当時は科学教育全盛時代です。国立教育研究所に併設された科学(理科)教育センターなら希望者はたくさんいるだろうと勝手に判断し、大澤先生のご好意に従わせていただくことにしました。後で平塚先生からお呼びがあり、結局は許可していただきました。

ところで大学院では、専門分化した社会学の下位分野から専攻分野を選ぶ必要があります。そこで教育社会学者の廣池千太郎先生が提唱する「モラロジの社会性」をよく理解して進展させるためにも、またこれまで学校教育に関係してきたので、教育社会学に絞って受験させてもらうことにしました。そこで、フランス社会学の研究者としてE・デュルケームの道徳教育論や、ソローキンと一緒にロシアの聖ペテルブルグ大学にいた後にフランスのソルボンヌ大学に移ったG・ギユルヴィチの深層社会学を研究していた清水義弘教

授の門を叩くことにしました。清水教授の名著『教育社会学』（東京大学出版会）には、ソローキンの諸研究がモラロジー研究にも有益なことが示唆されていたからです。

偶然に合格すると、すぐに大澤先生が来られて所長の「廣池千英先生にご挨拶しよう」と先導していただきました。千英先生はちょうど開発部（社会教育部）に来ておられ、後年大変お世話になる岩坂国夫先生らと歓談されていましたが、大澤先生のご紹介で恐る恐るご挨拶すると、上機嫌で「ああ、昨日、麗澤館に挨拶にみえていたようだね。学問は広く深くやりなさい」と望外のお言葉を賜り感激しました。後に職員身分のまま大学院に進んでよいこと、研究資料購入費として二年間毎月五千円を追加していただきました。

このような待遇は背後で大澤先生のご尽力があつてのこと。こうして先生には多くの人々と同じように「道」を開いていただきました。誠に有難いことで、廣池博士の提唱する「慈悲の心」とは、こういう心遣いのことだと初めて実感した次第です。

英国貴族の社会移動の事例 大澤先生が逝去されたのは平成一九年九月のこと。その直後の一〇月三日にNHKハイビジョン特集・城主たちの物語「悲劇のスコットランド女王」（二時間番組）を、BS一〇三チャンネルで見える機会に恵まれました。その内容は国家伝統問題にも関連していますので報告させていただきます。このドキュメンタリー番組は、スコットランドのアイランド系ケルト（ゲール）民族の系譜を千年以上も引き継ぐという、若くてどこことなく気品のあるアリーン・ムンロ（Aleen Munro）嬢がロンドンのウエストミンスター寺院に、イングランド女王のエリザベス一世と一緒にスコットランド女王のメアリー・スチュアートも安置されている「大きな謎」に関心を抱き、郷里のインバネスまでメアリー女王の苦悩の逃避・幽閉の生涯を詳細に探索する紀行録でした。見ている内に、彼女の実家のあるインバネスのムンロ準男

爵家まで到着したので、筆者も訪問したところのある近くのローズ男爵家も出てくるのではないかと熱心に見ていました（『れいろう』昭和五四年三月号）。その番組では各地の著名な紋章学者、系譜学者、歴史家なども多く登場して、その最近の学説も取り入れて緻密に考証した探索紀行です。その要点を列挙します。

英国貴族名鑑として有名な『バークスの貴族名鑑』や『英本国の王と女王』という系図一覧表によれば、現在の英国王室はスコットランドのメアリー女王の一人息子ジェームズ六世（一五六六—一六二五、在位一五六七—一六二五）／イングランド王ジェームズ一世の在位一六〇三—一六二五の血統を受け継ぐスチュアート王朝の末裔であり、スコットランド王の血統まで遡ると千年以上永続する王室です。そのジェームズ王の母メアリー（一五四二—一五八七、在位一五四三—一五六七）が生まれたのは一五四二年一二月のこと。父ジェームズ五世（一五一二—一五四二）とフランス貴族（公爵）の娘マリー・ド・ロレーヌとの間に長女として祖父ジェームズ四世が建設した豪華なリンスゴー宮殿（現在廃墟）で誕生しました。その時に父王が「この子はスコットランドとフランスとイングランド三国の女王になるのだ」と言っており、三国王家の紋章を合成して彼女の紋章を造って亡くなりました。その紋章は現存していますが、これが彼女に託された「宿命」でもありました。

だが、当時のスコットランド国内の治安はイングランドとの戦争に明け暮れて非常に不安定な状態にあり、祖父以前の国王たちのように命を狙われる危険性が出てきたので、国を守り抜くために生後七ヶ月で山岳砦のスターリング城に移され、そこで九ヶ月目の翌年七月九日にスコットランド女王に即位します。祖父は戦闘中に亡くなり父も早世すると、王位が益々危機に瀕したので母親がフランスに援軍を求めてメアリーは保護を依頼しましたが、皇太子フランソワと結婚して王妃になるという条件付きで受け入れられ、六歳か

ら皇太子の婚約者として母親の血族リーズ家に預けられ、洗練されたフランスの首都で育ちます。やがて一五歳で皇太子と結婚し、一六歳で国王に即位したフランソワ二世の王妃になります。彼女は身長一八〇センチ近くの長身で、非常に洗練された王妃になりました。だが、一年後に夫のフランソワが死亡し、二人の間に子供がなかったので、メアリーは微妙な立場に立たされました。そこで一五六一年の一八歳の時に一大決心をして、敵対関係にあるイングランドの領海を決死の覚悟で乗り切って、祖国スコットランドに女王として帰国します。その時に、彼女が得意とした刺繍には「美德は傷つけることによって繁栄する」という謎めいたラテン語が編み込まれているのです。

王女が帰国してみると、各地の貴族は好き勝手に行動していました。国内では有力貴族たちがカトリックとプロテスタントの信仰上の問題に深く係わって、一九歳の女王が五〇歳の宗教改革者の牧師ジョン・ノックスらとの論争に引き出されることもありました。

そのような渦中に巻き込まれた女王は、王の使命を死守する義務感からイングランド王家の血統に繋がる従弟のヘンリー・ダンリー卿を熱愛して、一五六五年七月末に二回目の結婚をしました。しかし、そこには大きな落とし穴がありました。夫が女王排斥派の有力貴族に取り込まれ、しかも日々乱交と乱行に明け暮れて、その挙句の果てに翌年二月に暗殺されました。その背後にある貴族らの魔の手から逃れるため、妊娠五ヶ月の身重で八千の近衛兵を引き連れて脱出し、砦城と言われるエディンバラ城に移ります。城内の狭い一室で同年六月一九日に一人息子のジェームズを出産します。

メアリー女王は一五六七年五月に反対派貴族のボスエル伯爵を取り込んで三度目の結婚をしますが、さすがにこの結婚には多くの貴族から輿論を買い、挙句の果てに戦闘でも敗北してロックレブンで投獄され、一

五六七年七月二四日に退位を迫られて息子ジェイムズ六世に譲位します。このような過酷な人生は女王自ら背負わなければならぬ宿命でした。

筆者がスコットランドの一男爵家に過ぎないローズ (Rose) 家に注目したのは、このような逃避や幽閉生活を強いられる女王を救い出した氏族の一つであるからです。スコットランド紋章院長 (Lord Lyon King of Arms) であつたトーマス・インズ卿の権威ある名著『スコットランドの氏族と家族のタータン』に取り上げられている八百年以上も男系で永続してきたローズ首長家は、ネス湖周辺で逃避行中の女王にキルウォック城内に隠れ家を提供しました。そこは今でも「女王の間」として大切に保存されています。さらに特筆すべきことは、後年エリザベス一世の後継者に指名されてイングランドの王位も継承したメアリーの息子ジェイムズ一世が、一度だけスコットランドに里帰りした際に訪ねた旧家でもあります。また、この家は英国の著名な小説家チャールズ・ディケンズや農民詩人のロバート・バーンズなどの文芸活動のパトロンであり、さらに英国の植民地化時代には南アフリカ連邦や南ローデシア (現在のジンバブエ) を開拓してきた氏族でもあります。

このようにローズ家はスチュアート王朝に忠誠を尽くしてきましたが、テレビ番組でも取り上げられた近隣のムンロ (Munro) 準男爵家も、メアリー女王が帰国してインバネス地方を巡視した時に、好き勝手にしていた有力貴族のゴードン一族が籠城したインバネス城を攻撃してこれを撃破し、女王の権威を取り戻すために城内に案内したのです。

このムンロ氏族は元々アイルランドにルーツをもち、その祖先はバイキングの侵略に悩まされたスコットランド王マルコム二世 (一〇〇五—一〇三四) の時代に傭兵として招集された人々であり、その首長

(chief) は今でもフォーリス城に住んでいます。この氏族もトーマス・インズ卿の著作に取り上げられ、ここにはメアリー女王の母親マリー・ド・ロレーヌから送られてきた自筆の手紙が保存されています。

これらの旧家の歴史に見るように、スコットランドでは国王と国家に忠誠を尽くすことが人徳の第一に挙げられる伝統があります。それは国家の統一に役立つからでしょう。

さらにスコットランド南部の中央に君臨してきたハミルトン (Hamilton) 公爵家も祖先がメアリー女王の帰国を歓迎し強く支持してきました。この名家には女王のデス・マスクが丁寧に保存されています。その由来はこうです。帰国して間もない女王が一九歳の時にエリザベス一世にイングランドの「王位継承者に指名してほしい」と請願したのですが、三度目の結婚を境にして、各地を転々と逃避行した挙句にイングランドに逃れ、それでも一九年間も幽閉されて全ての希望を失い、エリザベス女王に「後継指名を辞退します」と撤回を申し出ます。だが間もなく法廷で死刑宣告を受け、それにエリザベス一世が直ちに署名して一五八七年二月八日にホザリングイ城で断頭台の露と消えました。

その時の予想外に穏やかなマスクを見たアリン嬢は、ハミルトン公爵に「これが処刑後のお顔ですか。とても可愛い顔、汚れない人、こんな穏やかな顔をしているなんて予想外でした」と感嘆の声を上げました。最後に「アザミの花はスコットランドの国の花、棘もあるけど美しい花も咲かせます。そうメアリー・スチュアートのように」と結びます。

かの有名な女王エリザベス一世は、度々スコットランドを侵略したヘンリー八世の非嫡出子でした。その王位継承にはイングランドの内外でも多くの貴族が異議を唱え、ノーホーク公爵のような不服従の貴族も多かったようです。そのためでしょうか。エリザベス女王は生涯独身を貫いて「国家と結婚した」と言われて

います。その女王が自分の後継者にライバルのメアリー女王の息子ジェイムズ六世を、ジェイムズ一世としてイングランド王に指名したのです。このようにして、正当なイングランド王の血統も受け継ぐメアリー女王の夢は、ついに息子のジェイムズ一世によって実現されたのです。そのために両国の長い反目抗争の歴史は、ジェイムズ王がロンドンに移住して一応の決着をみたのです。後年、ジェイムズ一世はイングランドの地方の小さな寺院にひっそりと葬られていた実母の棺をロンドンのウエストミンスター寺院内に移して、エリザベス一世の棺と並んで安置しました。幼くして母親から強制的に切り離されて育った王の胸中に去来したものは何であつたのでしょうか。この併置は二人の女王に和解してもらうためであつたのでしょうか。

多くの人々に「道」を開いてくださった大澤先生、長い間未完成のままにしてきたご注文の「永続する英国王室と貴族の研究」を甚だ不充分ながらここに完結し、深甚の感謝の念をこめて御霊前にご報告申し上げます。さらに先生にも良く該当するラテン語の重要な教訓 *Virtus funeri superstes* (徳は葬儀に生き残る) を見つけましたので、一緒に捧げさせていただきます。その内実は先生ご自身がかつて一夫人の葬儀に列席された際に呟かれていたことです。大澤先生の第二次世界大戦後のご生涯は、モロロジ研究所並びに広池学園の充実発展のために捧げられました。まさに「至誠無息」の大先達でありました。どうぞ今後ともお見守り下さいませ。 合掌